

外国人留学生と日本人学生が協働でつくる 日本語プロジェクトワーク

奥村 聡美（東洋大学）

予稿

本発表では、外国人留学生（以下「留学生」）と日本人学生の混合チームが協働で日本語学習/国際交流イベントの開催を目指し、企画から成果発表まで一連の活動を行う国際共修型 PBL 授業の実践を報告する。

日本語プロジェクトワークは、体験を通して主体的に学び、社会で役立つ能力を醸成することを目的にデザインした課外講座の一科目である。学修目標には、①文化的背景の異なるメンバーと協力してプロジェクトに取り組み、協働力とコミュニケーション力を身に付ける、②日本語の表現力・発信力を高める、を挙げた。

活動期間は 2022 年 9 月~12 月、対象は日本、韓国、中国、ベトナム国籍の学部 2 年生~4 年生 15 名である。活動では、4~6 名で一つのチームを構成し、チームごとにミニスピーチ大会やまち歩きといったイベントを企画し、参加者の募集(Web ポスター配信)、イベントの開催と運営、成果発表(Web ニュースレターの配信)を行う。適宜グループ活動と全体活動を組み合わせ、活動内容によりオンラインまたは対面式で実施した。

三つのイベントには学内から 17~40 名の参加者が集まり、それぞれ好評を得た。活動メンバーらは、文化の違いに関わらず協力し合う大切さを実感する、チームワークの進め方や多様な考え方を理解する、教え合いの大切さを感じるなど、総じて肯定的な学びを得ている。活動の過程においては、日本人学生が留学生グループの間で疎外感を抱く、互いへの遠慮から指示や注意をためらう、チーム内の連携がとれず留学生がイベント本番の司会進行でつまづくなど、ネガティブな経験も経ている。

留学生、日本人学生ともにコミュニケーション上のジレンマやイベント本番での失敗体験からより良いチームづくりがイベントの成功には欠かせないことを理解し、メンバーとの関わり方・距離の取り方を模索する様子がうかがえた。活動後半には、調整型リーダーの活躍、懇親を目的とするアイスブレイキング・タイムの充実化、宣伝・広報・イベント内容の質の向上などから一人一人の成長が見られるようになった。様々な経験を糧とし、協働に向けて意識と行動を変容させていくことは「社会人への準備」につながるものと考えられる。